

れてたまるもんか。なんでも食べよ、家族の顔をみるまでは、なんとしてでも頑張らばけ！ 身体が、心が叫ぶ。食うことが第一、餓鬼道とはこうしたことをいうのだからか。

ただいちにずいに生き抜く執念が通じたのかどうかは解らなかつたが、食糧配給が徐々に良くなり、黒パン三百五十グラム、スープ、少しではあるが砂糖も支給されるようになった。作業も余りにも「ダワイ」「ヴィストレー」と言われたときは「スターリンピシピシ」と手紙を書くまねをすると、変わったようにおとなしくなることも覚えてきた。スターリン独裁政治、直轄部局政治局長、これが一番こわい。ソ連人の目がそう語っているのがよくわかるようになってきた。

極寒と栄養失調でふともとお尻の肉がなくなり、腕をふくめて骨と皮の状態のなか、「ダワイ」「ヴィストレー」の声と、自動小銃にこづかれながらの強制労働の日々。祖国、家族の顔を思いながら、異境凍土に無念の死をとげていった数多くの戦友達のためにも、なんとしてでも生き抜かねばと、強制労働にたえぬく自分であっ

た。

シベリアでの電気屋さん

新潟県 金田 市郎

二十年十一月揮春經由クラシキノ收容所をへて、ハバロフスク第十七收容所におちつく。收容所での労働はおもに伐採及び木材の集積作業で、木に関係したものであった。

山から帰り、皆と一緒に馬糧コウリヤンの浮いている重湯をすすっていると、工軍曹がきて、金田、御苦労だが、衛兵所までいってくれとのこと。何の用かと聞いても軍曹にも良くわからない。ただ、電気のわかる兵隊をということらしい。

衛兵所へいくと、俺の顔を見て兵隊が何かわからないが、ペラペラ言っている。俺にはチンプンカンプンだ……。おくれて通訳がきて、話がわかった。軍医の部屋の電灯がつかないので、修理しろとのこと。そんなこ

とかとアパートの部屋を聞き、一人でいく。看護兵なしで。

ちょっと心細かったが、部屋のドアをノック、なかから声が出たので「はいります」とドアをあけた。なかは暗いが、ボンヤリとなかは見える。二人で何かのさいちゅうらしかった。軍医が大きな声でどなる。あわてて部屋のそとにでた。返事は待てなかったのか。あとで聞けば、軍医は新婚だった。そとで立っていると、若い女がむかえにきた。暗いので顔はよく見えないが、早くなおしてくれと言っているらしい。軍医も軍服にきかえ、何かを言っているが良くわからない。

八畳ほどのなかに電灯が一つ、テーブルに椅子が二個。タイムツで配線をしらべたが、フューズボックスはない。テーブルにあがり電球をはずして見る。フィラメントが切れている。新しい電球はと聞けば、ないと言ふ。困った。また衛兵所へ。通訳を呼んで聞いてもらう。新しい電球は区長へいけばもらえるのだ。電球をもらい、取りかえ、点灯する。何のことはない、ソ連の配線は内地と違い、ノーフェューズ配線である。

明るくなった室内で軍医と奥さんの顔を良く見た。室内は何もない。つくりつけのストーブとベッド、テーブルに椅子。食器、下着等は見当たらない。俺達とあまり変わらない生活だ。電気屋初仕事を終り、ハランヨで送られ、収容所へ帰る。それ以後、山から帰ると、よく呼びだされ、電球の取りかえをやらされた。

衛兵所でも顔をおぼえられ、電気区長と奴等もかたこととの日本語で話す。区長の部屋、ノックで出迎えはプタである。ニワトリはバタバタと歓迎、子供もなれたもので、早く早くとよってくる。点灯。なかは軍医の部屋とかわりばえしない。区長のハランヨで煙草をもらい、一服しながら、かたことのロシア語で聞いてみる。寝るのは夫婦がベッドのうえで、子供二人はベッドのしたに枯草をしき、寝る。プタもニワトリも皆一緒とのことである。個人財産のためか。

ある極寒の日、作業は休み。戦友のふとももをだきあって横になっていた。また呼び出し、衛兵所には所長、通訳等がおおぜいものものしい。通訳の話の聞けば、電話が通じないので修理にでてくれとのことであ

る。修理といつても材料も工具もない。どうすればよいかと話す。そのうちに地方人が一人、鉄線を少し持ってやってきた。ベンチはと聞けば、ポケットから釘抜きを出して、これで切るのだと言う。何だか良くわからないが、早くいけと二人は追いだされる。

二人でマタボーズ（トロッコの鉄道）ぞいに巡視をしながら進む。道々かたことの話で聞けば、電話の不通は、先方は一番不安なのだそうだ。暴動が、膝までの雪の中をもくもくと歩く。電話線はこだちについている。一時間くらい歩いたかな……雪のうえに腰をおろす。ダバイ、ダバイ、ダバイと彼は言う。また歩く。六尺近い彼と五尺の俺と、食べる量も違う二人の差はいわずとされたこと。

その中に彼は煙草をくれる。煙草を吸って元気をだせという意味らしい。煙草よりも腹がへった。そんなことを考えながらトポトポと歩く。断線場所が見つかった。マタボーズとハバロフスクとの中間点である。交換場所の屋根が見える手前百五十メートルほどのところである。

日も暮れてくる、断線場所も悪い、大きな立ち木の障子のつけねである。彼は、日本人がきてから雪が多くふるようになり、雪で大きな枝が折れ、切れたのだとボヤク。二人では修理不可能だと言うと、簡単にわかったと交換所へと急ぐ。交換所では中年の女がでてきた。小さな部屋にいれられた。部屋は暖かい。少し時間をおいて二人がはいってきた。本部との連絡はとれた。今日はここで休め。明日帰るのでと、女が持って来た黒パンの耳と煙草をおくとでていった。

それを食べ終わった頃、見廻りのつもりだろうか、酔って二人ではいってきた。女はビンとコップを持っていく。二人で何か話しかけるがわからない。ビンの中身をコップにそそぎ、飲めと言うのだけはわかった。飲む。口中が焼けるようだ。ウオッカというのか。それを見て二人は手をとりあってでていく。腹は満腹、アルコールは入る。ぐっすりと寝た。

朝起こされ、パン屑を腹につめ、出発。なぜか女も彼も上機嫌だ。昨日歩いたあとはない。彼も今日はいく煙草をくれる。夕方近くに収容所へ帰りつく。

そんな主労働以外の仕事をしながら、柵の中で二つ年をとり、ハラシヨラポータとか言われ、ナホトカにむかう。ここでは電気屋集合で仲間五人と聞く。初日はふといワイヤを焼かされた。何でと不思議に思う。二日目、そのワイヤをといて金網をつくれと言うのだ。それも二耗角の目を針一本で一メートル二メートルを。一日中編んでもそんなに編めるわけがない。三、四日と続けて見たが、指先には血豆、彼はどなるばかり、一週間で首となる。

翌日、五人は別な男につれられ重労働の作業だといわれる。作業内容は建柱とのことだ。十五メートル柱をA型に組んだ場所で説明を受ける。一本を建てれば百％だという。五人では無理だと言うと、別に兵隊を三十人つけるとのことだ。五人といっても建柱経験者は一人、電車の運転、鉄塔屋、内線屋ばかりである。必要資材を港がおおって動けない船よりはこぶ。昼となったが、我々には関係ない。皆んなに建柱の方法を納得のゆくまで説明する。

穴はほってあり、建てるだけ。おこす方向につな一

本、反対側に一本とソソモ、五人は根本を分担して建柱、そんな初日だったが、一時間ほどで柱は建った。あとは根本をうめるだけ、ちよくりつを見ながらとけた水と一緒に土のかたまりをいれる。見る見るしたからこおってゆく。うめ終わり二十分ほどで柱は動かない。つなをはずす。百％である。

そんな作業が続く。午前中で百％の重労働は楽しかった。ある日同人が二本を建てたら百五十％の話ができる。彼に、捕虜は百五十％、お前は二百％かと聞けば、首をコックン。にくめない男だ。皆んなと相談したら、建てるという。翌日から二本の建柱、十二時頃には収容所に。

ある日の建柱なかば、腕木部分が隣の電話線にあたり動かなくなった。根本はしたにつきどうにもならない。引きかたのつなを一本ゆるめさせ、柱が動かないよう両方をつなを張ってもらう。四十五度ほどの柱をつたってのぼる。電話線を足でけりながら少しずつおこす。線がはずれるまでくりかえさす。そんなことをやって地上におりた。

拍手の音で振り返ると、金ピカの軍人が二十人ほどハラシヨ、ハラシヨと言っている。通訳がきて、名前などを聞かれる。帽子をだせという。パピロスなど一つの帽子でははいりきれない。仲間の帽子もかりる。あとで皆さんで分配す。

また心配が出来る。ハラシヨラボータでまた帰りがおくれるのではと。五人で心配をしたが、それから一週間ほどで迎えの船が本国よりきた。無事に乗船できた。

ダモイだ、ダモイだとだまされながら、山での労働、みんなが休んでいるときの電気の仕事、舞鶴が朝もやの中に浮かんだとき、生きて帰れたと戦友とだきあって涙した。

朔北の苦闘シベリアにて

新潟県 若井 正七郎

昭和二十年八月十五日、ふりかえって思いだす日であり、かつての千島は当時、松輪島松原隊に所属して、単

純に国のためというが、心身ともおとろえを見せた軍人として、終戦をかんちしたのが十九日ごろか、二十二日ごろなのか、ソ連の来島により、経験したことのない武装解除と、何が何だかさっぱり不明、これからの人生のへんせつというが、日本に帰れるという。いいふらしで二十六日ごろ。とにかく船にのり、一日二食くらいでそれも少量で。

船は南へいくかと思えば、その船は、海を知っておると思われる、北海道附近を通ると思われる、職業を漁師とする人達の話では、北へ動いておるらしいとのこと。幾晩星を眺め、これからの進路、又は近き人生の将来もわからぬまま、ついた港が、通称「ソフガワニ」らしい。(コムソモリスク州)

船よりおりて汽車に乗る。やはりこおりついた貨車、床は冷たい。窓はあけることがよういではない。少しこわれている。歩哨兵(カンシ)らしい。ダワイ(歩け)、ダワイ、ダワイである。幾百キロ、幾日乗ったのだろうか。結局、伐採作業を労働とする収容所である。一応軍隊の規律的なものをささえに、上官のいわゆるソ連より